身体教育のメディアとしての「運動」¹

—ハンス・レンクの「達成としての運動」概念を手がかりに—

久保正秋 (東海大学)²

Abstract

The purpose of this study is to consider movements as a medium of instruction in physical education based on Hans Lenk's concept of "movements as proper achievements."

In the first part of this paper I examined the relation between Hans Lenk's concept of "body as medium" and "bodily movement." In the second part of I discussed "movements as proper achievements." In the third part I discussed "everyday movements" and "sporting movement" as a medium of instruction in physical education. In the last part I considered the grounds for "everyday movements" as a medium of instruction in physical education.

The results of this study were as follows:

1. Lenk stated that "the body is an action center as well as a medium." He considered the body as the constituent vehicle and constitution of existence, and stated that "without motor performance there is no activity, no life, and no possibility of expression of any kind." After all the body can constitute its existence through movements.
2. Lenk discussed movements as proper achievements within a culturally impregnated and evaluated framework, and stated that "the learning new, difficult, goal-oriented movements involves mastering one's own body and surrounding world, it involves mediating new variants of self-expression, self-representation, and self-confirmation." Thus bodily movements have the possibility of a medium toward the world.
3. Lenk stated that "the movements and actions of sports must be distinguished from the everyday movement patterns", and represented that "everyday movements" can be regarded as achievement in the widest sense, but are not socially institutionalized. He concluded that "sporting movements are not the only possibility and forms, but they are, indeed, characteristic vehicles of the individual's turning towards and copying with the world." However, as "sporting movements" are institutionalized within a competition-oriented society, they tend to decline from a medium of instruction in physical education to a vehicle for the product of movements.

¹ Movements as a Medium of Instruction in Physical Education

- Based on Hans Lenk's concept of "Movements as Proper Achievements"-

² Masaaki KUBO, Faculty of Education, Tokai University, 1117 Kitakaname, Hiratuka-shi, Kanagawa, 259-1292, Japan

4. Since “everyday movements” are not institutionalized within a competition-oriented society, they are free from the product of movements. And because they are not the idealized norm patterns, therefore they have a diversity. It was concluded that “everyday movements” (achievements in the widest sense of the word) as a medium of instruction in physical education are grounded on the superiority to the product of movements and the diversity of movements.

Key Words: Movements, Medium, Physical Education, Achievement

キーワード：運動，メディア，身体教育，達成

はじめに

身体教育は「身体」に関する「教育」であり、その身体的活動、特に「運動」は、その中心的な内容である。本研究は、この「運動」を身体教育における「メディア」¹⁾として捉える。従来の身体教育においては、スポーツの場面に見られるような「走る」「跳ぶ」「投げる」などの「運動」を「より速く」「より高く」「より強く」成し遂げることが求められている。その反面、「歩く」あるいは「ゆっくり走る」などの日常的な「運動」はあまり重視されていない。今回の研究では、ハンス・レンクの「達成としての運動」概念を手がかりに、この日常的な「運動」が身体教育における「メディア」として位置付くための根拠を探ることを目的とする。

1. 「身体」のメディア的様相と「運動」

ハンス・レンクはその著書「Social Philosophy of Athletics」の中で「身体」のメディア的な様相とその「運動」による「達成」の重要性を論じている。まず、レンクは「身体」を次のように捉える。

身体は様々な様相と行為の特質を表示する。身体はメディアであるとともに、行為の中心として「ある」。同時に、行為の中にお

いてのみ理解されることが出来るデザインであると同じく、『私』の世界における存在の方法であり状態である、と考えられる²⁾。

さらにレンクは「人間の、その身体との関係は、彼の、世界および彼の人格との関係と、分かつことができないくらいに織り交ぜられる」と述べ、身体的な経験とその身体の変化のプロセスによってのみ、世界との接触と関係が成立することをその理由としている³⁾。このように「身体」は、「世界」と「私」を繋ぐものであると同時に、「世界」の中の「私」自身そのもののなのである。さらにレンクは次のように述べる。

身体は結合物であり、構成物であり、そして、われわれのまさしく実存からなる本質である。その様相、経験、そして決定は、この関係が変化し、経験されるところの、その仕方に依存している⁴⁾。

このようにレンクは身体を「構成する媒体 (vehicle) であり、存在の構成」であると洞察し、その様相、経験の仕方を決定づける身体の変化のプロセス、すなわち「運動」に中心的な意味を与え、「運動性のパフォーマンスがなければ、活動も、生活も、そしてどんな種類の表現の可能性もない」と述べる⁵⁾。つまり、「世

界」と関係する、あるいは「世界」にある身体は、「運動」することによってその存在を構成するのである。かつて養老孟司は、ある講演会で「人間のコミュニケーションの全てのアウトプットは筋肉に依存している」という主旨の発言をした。つまり、「話すこと」「書くこと」、あるいは「瞬き」「微笑み」など全ての人間の表現は筋肉の働きがなければ不可能ということである。このように身体はその筋肉を用いた「運動」によってのみ「世界」を構成することができるのであり、また「世界は、身体的な行為の寄与によって、またそれを通じて理解できるように創られるのである」⁶⁾といえる。

2. 「達成」と「運動」

1) 広い意味での「達成」（日常の運動）

レンクは人間を、世界に向けての行為のスタンス（状況に応じてデザインされた行為と行動のパターン）を取ることが義務づけられている存在であるとし、その行為を「達成」と呼ぶ。この彼の述べる「達成」には、広い意味での「達成」と、特にスポーツの達成に代表されるような、狭い意味での「達成」とがあり、この両者は区別されなければならないという⁷⁾。広い意味での「達成」に関してレンクは以下のように説明する⁸⁾。

このより広い意味では、人間の身のこなしや姿勢までもが「達成」である。このことは、身体的運動の場合には、より一層、明らかである。ここにおいて、身体メディアとしての役割、「私」と身体との関係の変化、そして彼の身体的状態のなかで、そしてそれによる人間の、世界への方向付けと同様に目標、これらが、パーソナリティーの個人的経験、歴史の一定の連続性という条件の下で、関連した行為パターン、その全体的意味に基づいて統一されるのである⁹⁾。

この広い意味での「達成」である「人間の学習された運動行動（Erwerbsmotorik）」は、完全な本能的メカニズムを欠いているが故に、本能から開放され、文化的に、また自発的に構成されるための可能性と機会、意識的な学習のための発達した運動のパターンを提供し、その「新たな修正は、われわれの世界との関係において、そしてわれわれ自身に向かって、われわれの身体と『身体性』に向かって、抑制、あるいは創造的変化を常に示す」とレンクは主張する¹⁰⁾。つまり、人間の「運動」は「世界」へ向けた働きかけであると同時に「私」自身（身体）に対しての働きかけなのである。例えば「歩く」という運動は、それによって新たな「世界」を切り開いていく行為であると同時に、停止していた自らの身体に修正を加える行為でもある。また、初めて歩行する幼児は、意識的に運動パターンを学習し、身体を修正すると同時に、その運動によって新たな世界を経験することになる。

さらにレンクは、この「世界」と「自分自身」に向けた運動は「目標—志向された規範のシンボル化と制度化という方法を通して、文化的に植え付けられる」と述べる¹¹⁾。つまり、人間の運動は、文化的、社会的基礎によって相互に決定づけられるのである。例えば先に述べた「歩く」という運動も、我が国において明治期に、ある目標のために修正され、江戸時代には一般的な歩き方であった「なんば」歩きとは異なった運動パターンとして学習されている。このように運動の「文化的な、すなわちシンボリックな構造は、基礎生物学的構造パターンに重ね合わせられることは避けられない」¹²⁾のである。しかしレンクは、そこに運動の意味を見出し、次のように述べる。

故に、世界に向かってスタンスを取ることに関連した機会も、前述の「メディア的」そして「行為特質」も、必然的に運動と身のこ

なしのシンボリックな特質を取り入れる。そしてこれらの両方がパーソナリティーのための表現手段となり、そして同時に、人格の統一性と全体性に貢献するのである¹³⁾。

2) 狭い意味での「達成」(スポーツ運動)

レンクの先に述べたように、広い意味での「達成」(日常の運動パターン)と、狭い意味での「達成」(スポーツの運動と行為)とは区別されなければならないとする。両者は特別な文化的伝統と歴史的特性によって性格づけられているのではあるが、スポーツ運動のパターンは、それ自体の社会的フレームワークの中で制度化されたものであり、日常の運動パターンと比較して、「意識的に計画され、標準化され、目標-志向し、特殊化し、そしてパフォーマンス-規制されている」ものである。レンクはこの「人工的に構成された多様性と特殊性」によってスポーツ運動は、「社会的に適切な方法による自己-表現のための機会」と「社会的に自由になる行為パターンと目標-設定」の範囲を広げると述べ¹⁴⁾、次のようにそのスポーツ運動の意義を強調する。

新しい、困難な、目標-志向された運動の学習は(中略)、自分自身の身体とその周りの世界を支配することを伴い、自己-表現、自己-描写、そして自己-確認の新しい別形を媒介すること(mediating)を伴う。厳密に言えば、スポーツは、心理身体的に連続した行為性質を変更する限りにおいて、全ての人間の豊かさに貢献するのである¹⁵⁾。

このようにスポーツ運動は、社会的に制度化された理想的な目標志向の行為であり、「様式化されたフレームワーク内の、自分自身の遂行の表現」¹⁶⁾なのである。

3. 教育の「メディア」としての「運動」

レンクのここまでの記述は、人間にとっての「達成としての運動」を論じたものであり、教育の「メディア」としての「運動」を論じたものではない。しかしながら、彼が見出した「運動」の意義、すなわち「パーソナリティーのための表現手段」「人格の統一性と全体性への貢献」「全ての人間の豊かさへの貢献」は、教育の「メディア」としての「運動」の位置づけに多くの示唆を与えてくれる。ここでは、レンクの示した「達成としての運動」を、教育の「メディア」という観点から捉え直すことを試みる。

1) 教育の「メディア」としての「スポーツ運動」とその限界

レンクは「スポーツ運動」を人間が世界へと向かうための特徴的な媒介物であり、「世界へ向けて、自分自身の身体状況へ向けて、そして自分自身へ向けてふるまう機会を生じさせるもの」とする。そしてそれによって「個人的な生活とパーソナリティーを修正し、変化させる」と述べる¹⁷⁾。教育の「メディア」として「スポーツ運動」を位置づけるには、このレンクの記述を次のように捉え直す必要がある。つまり「スポーツ運動」は、個人が集団(社会)の成員として適合するようになる、すなわち「社会化」のための「メディア」として、また目標に到達しようとする行為のための「メディア」として働き、それによってパーソナリティーの発達に貢献すると考えるのである。これらの関係を、教育という関係に置き直せば、パーソナリティー発達という「目的」という条件下において、「作用項」と「被作用項」を媒介するものとして「スポーツ運動」を位置づけることができる。その時「スポーツ運動」は教育の「メディア」となる。こうして、「世界」との、そして「自己」との「メディア」であった「ス

ポーツ運動」は、「世界」と「自己」へ向かうように働きかけるための「メディア」として、教育という関係の中に位置づけることが可能となる。

しかしながら「スポーツ運動」は世界へ向けての「自分自身の遂行の表現」であり「社会的に制度化された理想的な目標志向の行為」であるが故に、教育の「メディア」としての限界を有することになる。レンクは「スポーツ運動」を「理想化された規範パターンであり、それらは社会的、同時に文化的、そして歴史的に決定され、選択され」たものとする¹⁸⁾。また彼は「社会的存在としての人間」を、他者や社会的期待と比較することによって自分自身を評価することができるものとし、「その目標－志向行為の制度は、人が目標を理解し、おおよそ到達したその度合いに対する比較と評価（両者は必然的に社会的なものになる）の意味を含むのである」とする。そして「自己－確認、自己－確信、そして自己－評価でさえもが、社会的に標準化した制度的な期待と評価から独立することが不可能」¹⁹⁾であるとし、次のように述べる。

他者よりも良く、また自分自身の以前のパフォーマンスより良くなろうと努力することと試みることの制度的なパターンは、社会的な要因によって深くしみ込まれた、独特の文化的、価値－志向されたパターンを表す²⁰⁾。

さらにレンクは「記録－志向された達成スポーツと現代西洋文化の自然－科学的、経験的な態度」の密接な関係に関して「個人的な行為と運動と見なされる制度化された達成競争は、ギリシャや現代の西洋のそれと同じように、競争－志向された社会が表現する個人主義的価値に由来する社会的規範によって生じる」と述べ、その達成競争が、スポーツにおいて競争的

文化として社会文化的に受胎されるとしている²¹⁾。このように、達成社会と密接に関係し、社会的に制度化した基準を有する「スポーツ運動」は、それ故に目標設定－達成への努力－評価という明確な道筋を有し、パーソナリティーの形成に貢献するものであるが、同時に、その制度、基準を決定する社会、文化によって影響を受けることにもなる。

このレンクの謂う「スポーツ運動」の実践を手がかりとして「競技スポーツ（Athletics）」の意味ある体験を検討した久保は、「競技スポーツ（Athletics：レンクの謂うスポーツ運動）」には「目標－志向－達成」、「社会的行動」という意味ある体験が見られるが、同時に、結果としての「勝利」の重視、ごまかしや相手の弱点を突く爽快感も体験するとし、「競技スポーツ（Athletics）」はその本質において「諸刃の剣」という問題を有していると論じている²²⁾。このことは、レンクが先に指摘したように、「スポーツ運動」が「理想化された規範パターン」として制度化される基準の設定は、その社会に依存するという点にある。「競争－志向された社会」における「スポーツ運動」は、教育の「メディア」としても、その「競争－志向」という基準から逃れることはできず、その競争の結果（記録や勝敗）に影響を受けることになるのである。

本研究は次に、レンクの論じたもうひとつの「運動」、すなわち、狭い意味での「達成」（スポーツの運動と行為）とは区別された、広い意味での「達成」である「日常の運動」に注目し、教育の「メディア」としてのその根拠を考察していく。

2) 教育の「メディア」としての「日常の運動（広い意味での達成）」

レンクは、広い意味での「達成（運動）」すなわち「日常の運動」と「スポーツ運動」の両者の性格を次のように述べている。

最も広い意味での運動とスポーツ運動は、とりわけそれらが、人間と「私」の「達成」として解釈されるならば、社会的な標準化、そして同時にパーソナリティーの表現として、またパーソナリティーの活動的構成とその発達への貢献として役に立つところの達成行為の相対的に個人化した性格、が明らかに示される²³⁾。

このように「日常の運動（広い意味での達成）」と「スポーツ運動」はともに、自己の表現とパーソナリティーの発達へ貢献するとされる。このことは、先に「スポーツ運動」が身体教育の「メディア」として位置づけられたと同様に、「日常の運動（広い意味での達成）」を身体教育の「メディア」として捉えることにその根拠を与えてくれる。しかしながら「スポーツ運動」が「目標-志向で、社会的に制度化された」ものであり、それ故に「理想的な規範パターン」として成立しているのに対して、「日常の運動（広い意味での達成）」は未だ制度化が不十分なものであった。この制度化に関して、オーモ・グルーベは「スポーツ」の基本要素は運動であり、文化として客観的に確定したものであるとし、レンクと同様にその社会的制度化を指摘している。そして、「社会現象」並びに「文化現象」であるスポーツは、運動を「客観化」とすると同時に規定し、その制度や組織、文化、あるいは規範や規則、設定された目標は多様な運動の可能性を限定してしまうと述べる。しかしグルーベはその規定、限定が故にスポーツにおける運動は多様な形態として発達し、発展したのであり「スポーツは一方で（意味の）『複雑性』を減少させながら、他方では増大させていく」と述べている²⁴⁾。これらの指摘に見られるように「日常の運動（広い意味での達成）」は、制度化された「スポーツ運動」と比較して未発達な、漠然とした教育の「メ

ディア」として位置付けられる。例えば日常の「歩く」という運動は、「競歩競技」のように制度化し、明確な目標とそこへのプロセスが確立しているものではない。よって「スポーツ運動」に見られた「新しい、困難な、目標-志向された運動の学習」による、人間の豊かさに貢献する「自己-表現、自己-返写、自己-確認」への「メディア」という性格を有することはない。しかしながら、この制度化が不十分であること、それによって、「競争-志向された社会」における「競争-志向」という基準から逃れることは可能となる。ここに「日常の運動（広い意味での達成）」の身体教育の「メディア」としての意義とその根拠を求めることができるのではなかろうか。

4. 「日常の運動（広い意味での達成）」の身体教育の「メディア」としての根拠

では、この「日常の運動（広い意味での達成）」は、どのように身体教育の「メディア」として位置づけることができるのであろうか。久保は、「身体教育」における「人間形成」に「生成」という概念を取り入れることを試み、「教える-学ぶ」という関係による人間の「形成」とは異なる、体験による人間の「生成」という次元を設定している。そしてその生成の次元において、脱自体験による「生成」ではなく、「意味ある体験」による「生成」に注目し、それを、自己経験と世界経験による「意味」が生まれる次元としている²⁵⁾。この久保の述べる人間の「生成」のための「意味ある体験」、そこへと媒介するもの、すなわち「メディア」としてこの、未発達な、漠然とした「日常の運動（広い意味での達成）」を位置づけることはできないものであろうか。例えば、先に述べたように「歩く」という「運動（広い意味での）」は「競歩競技」における「歩く」という「スポーツ運動」と比較してその制度化

は不十分である。「歩く」ことは、規則や設定された目標によって明確に規定されるものではなく、また「記録－志向や競争志向」されたものではない。しかしながら、それ故に「日常の運動（広い意味での達成）」は、その運動の結果（記録や勝利）によって左右されることはなく、それによって開かれる「世界」は多様であり、また豊かなものになるのではないだろうか。「記録－志向や競争志向」された「スポーツ運動」も、もちろん「意味ある体験」である。しかし、より速く「歩く」、あるいは「走る」のではなく、ゆっくりと「歩く」「走る」こと、それもまた「意味ある体験」であり、人間の「世界へ向けた行為のスタンス（状況に応じてデザインされた行為と行動のパターン）」であり、広い意味での「達成」である。先にレンクが示したように「身体的な経験とその身体の変化のプロセスによってのみ、世界との接触と関係が成立する」のであり、「日常の運動（広い意味での達成）」は、その社会的制度化が不十分である故の複雑性、多様な運動の可能性によって、「スポーツ運動」とは異なる「世界との接触と関係」を成立させ、それが「意味ある体験」を人間にもたらす。

レンクは次のように述べる。「幸福という状態は、『身体的なるもの』をメークアップする『行為特質』と同様に状況とメディアに依存している。幸福は、人間の、世界に向けての行為のスタンスと、その行為の目標志向と指向性とは複雑に織り交ぜられているのである」²⁶⁾。

「スポーツ運動」は「社会的に制度化された理想的な目標志向の行為」であり、「様式化されたフレームワーク内の、自分自身の遂行の表現」であり、それ故の「意味ある体験」を人間にもたらす。そして、レンクが「スポーツ運動」と区別した「日常の運動（広い意味での達成）」は、社会的な制度化が不十分なものであるが、それ故の運動の結果からの超越、そして複雑で多様な運動の可能性が、身体教育の「メ

ディア」として多くのものをもたらすと考えられる。

本研究は平成17年度～18年度科学研究補助金（基盤研究(C)(2)）を受けて行われたものである。

注および引用・参考文献

- 1) 「メディア」という言葉は一般的に視聴覚機器などを意味するものとして用いられている。本研究では「メディア」という言葉を「中間にあつて作用するもの（今井）」という広い意味で用いている。佐藤の身体教育の関数的定義「 $PE=f(a', b', c'; P')$ 」に基づいてこの「メディア」を位置づければ、その「 c' ：媒体項」を意味するものである。

今井康雄（2004），メディアの教育学 ―「教育」の再定義のために―，東京大学出版会，1.

佐藤臣彦（1993），身体教育を哲学する―体育哲学叙説―，北樹出版，216.

- 2) Lenk, H. (1979): *Social Philosophy of Athletics*. Stipes Publishing Company, 47.
- 3) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 47.
- 4) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 47.
- 5) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 49.
- 6) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 50.
- 7) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 47.
- 8) レンクはこの文脈では、「広い意味での運動」「広い意味での達成」という両方の言い方を用いているように、「達成」と「運動」とを同様な意味で用い、「身体運動」を「達成」として捉えている。それはレンクの次の記述からも伺える。

「このような身体運動，（中略），それは常に，特別な価値概念と目標計画に結びつけられた「個人的な創造的達成（a personal creative achievement: Buytendijkの引用）」で

ある」 (Lenk, H. (1979), *ibid.*, 48.).

「文化的に浸透され、教育されたフレームワークの中の、固有な達成としての運動」 (Lenk, H. (1979), *ibid.*, 49.).

「第一に、これらの達成は、最も広い意味で、目標-志向で、社会的に制度化された、そしてパターン化した一連の運動として解釈されるであろうものであった」

(Lenk, H. (1979), *ibid.*, 53.).

9) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 48.

10) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 48.

11) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 48.

12) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 48.

13) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 48.

14) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 50.

15) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 51.

16) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 52.

17) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 52.

18) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 53.

19) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 53.

20) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 53.

21) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 55.

22) 久保正秋 (2006), 身体教育のメディアとしての「スポーツ」批判, 体育・スポーツ哲学研究 Vol.28 No.1 所収, 11-19.

23) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 53.

24) Grupe, O. (オモロー・グループ: 永島ほか訳) (1997): 文化としてのスポーツ, ベースボールマガジン, 69-70.

25) 久保正秋 (2005), 「体育における人間形成論」の批判的検討5, 体育哲学研究第36号所収, 1-10.

26) Lenk, H. (1979), *ibid.*, 47.

受付 2006年9月26日

受理 2006年11月27日